

ロマン主義からモダニズム芸術へ pp. 98~115

・ベー-Xのキリスト教神学

・ベー-Xの思想

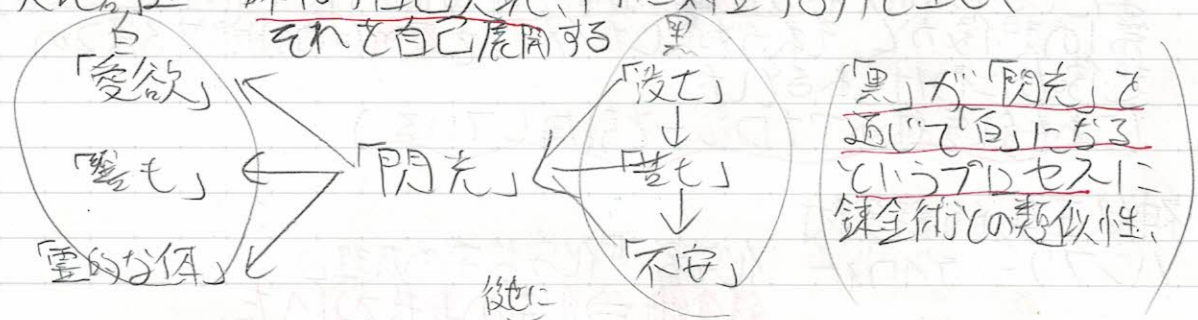
ヤーコブ・ベー-X (1875-1930) : ただの靴職人、だった
1600年に「神秘的な体験」、
それをもとに1612年「閃光」を体験
思想家として影響を与える
(→スウェーデン・アカデミー)

・ベー-Xの「天地創造」
「一性」または「無在」→原初的な源
いかなる意味においても制限を受けない絶対性の領域
(真の意味での永遠)

↓
ソフィア=賢知: 三位一体の力を受けとめて活性化する
能動的な端

三位一体が錬金術の男性性を受けもつとすれば、
ソフィアは女性性を受けもつ。

天地創造 ⇒ 神の自己実現、内に対立する力を生じ、
それを自己展開する



(これらを表現する図版として「宇宙的な人間」が創作された、)
体の各部位が惑星を、心は霊的性質を示す。
ルキファルの墜天は「閃光」による変容の拒否と解釈され、
アダムはソフィアではなくエバを伴侶として選んだ。
しかしソフィアはキリスト=アダムの子のからだとなり、統合される。

ロマン主義と錬金術

想像力の覚醒

ロマン主義：「理性」の限界を越えようとする思い。
 (18世紀末～19世紀初め) 啓蒙主義を補完する形で「想像力」が導入された。
 ここでいう「想像力」とは神と同一化するプロセスそのものとして、
 特に詩的な想像力の覚醒が必要とされた。

↓
ゲーテの思想が注目された

ウィリアム・ブレイク (イギリス)：詩人

対立とその統合 ⇒ 人間の救済の過程。
 天国と地獄を人間に内化するものとし、
 その対立と統合が「衝動」あるいは「力」とした。

このようなロマン主義的な創造力は錬金術的な世界観とも結びついており、
 実際サミュエル・テイラー・コールリッジはその意味で錬金術 = 自然哲学とした。
 → 硫黄と水銀が対立するように、ヒトの 主観性 と 客観性 は対立している。
 また、想像力は「神の創造行為が有限の精神内で繰り返される」
 第1の想像力として、それが知覚したイメージを 溶解 (= 再解釈) する第2の
 想像力にわけられるとした。

(これも錬金術のアナロジーを引用している)

神秘主義的錬金術

ハンフリー・デーヴィー：化学者『化学哲学の原理』

錬金術 ⇒ 化学の転換を述べた。

また「実験」の起源をアラビア錬金術とした。

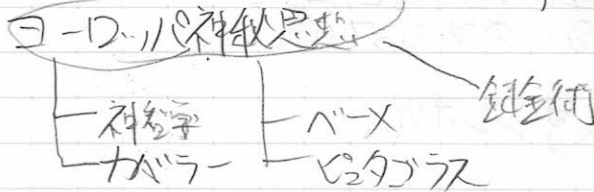
19世紀には自然科学としての錬金術はすっかり退潮してしまうが、
 ゲーテ的な神智学に形を変えて残りを続けた。(⇒神秘主義)

モダニズム芸術と錬金術

・モダン・アートの影響

モーリス・タクマンの展覧会 ⇒ 芸術における重要なもの
——抽象絵画 1890~1985

ヨーロッパ神秘思想の影響を受けた
アートのコレクション



(※モダニズムにおいて対立物の一致における絶対
→ 錬金術の対立思想)

「個別」と「不変」の均衡 ⇔ 地上と天上の調和

シュルレアリスム

ダダイズム (1916 42-リル)

シュルレアリスム (1924) (夢) と (現実) の対立 ⇒ 超現実

※ A と B の「対立」から描き出される「C」という調和、という形式は
神秘思想 = 錬金術からの引用

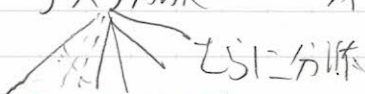
A, B, C にあたるものをそれぞれこの構図はよく見られた

ロスト・シンボルの「密儀の手」

・マンリー・パーマー・ホール

神智学協会の分裂

インド派 アニー・ベサント
アメリカ派 ウィリアム・ジャッジ



薔薇十字同志会 マックス・ハイデル

↓
その弟子マンリー・パーマー・ホール
『薔薇十字大系』

「密儀の手」

アメリカ連邦議会議事堂の円形大広間におかれたピタゴラスの右手
親指から順に、王冠→星→太陽→魚灯→鍵の刺青⇒錬金術的モターフ



これ自体が「密儀の手」として神秘的モターフ象徴となった。

「密儀の手」には錬金術の奥儀を象徴する「魚」と「海」も描かれているが、
参入したばかりの者には見えないようになっている。

「魚」はそれ自体がキリストを示すシンボル、

読了、

もともとサブカルチャーでひんぱんに引用される
錬金術の元ネタを知りたい、という意図で読み始めたが、
その実化学史としての読み応えもあり、
想像していなかったダイアの面白さがあった。
一方で、錬金術の根拠を流れる哲学的な部分に
ついてはあまり理解できておらず、
「アイデア」で全部通じる話で数世紀単位でくっ返っていた
ことについては、正直よくわからなかった。